

【輝いている人】 11 p

濱口真光さん

【まちの話題】 12 p

鬼が辻 文化財防火デー
ペレットストーブ ほか

【市政トピックス】 6 p

4月8日(日) 岡山県議会議員選挙
火の取り扱いには注意を
手数料を見直しました
市職員の給与状況

【地産地食】 23 p

トマト

特集

自転車のルールとマナー 2p

お知らせ 16p
ボイス 21p
人権 22p

●シリーズ●「やっぱりええなあ。総社のまち」「介護保険」「健康アドバイス」「市長室から」 14 p

Sesshu 雪舟没後 500年 Master of Ink and Brush: 500th Anniversary

雪舟は、当時としてはとても長命な画家で、最晩年まで健筆を揮いました。前回紹介したように、文亀元年（1501）、82歳時には「渡唐天神図」（岡山県立美術館蔵）を描き、また同年ごろには、はるばる丹後（京都府）を訪れ、実景写生をもとに「天橋立図」（国宝 京都国立博物館蔵）を制作しています。しかし、その稀有のエネルギーもついに尽きたときがきました。山口の旧居雲谷庵に遺されていた「山水図」以参周省・了庵桂悟賛（国宝 個人蔵）の了庵の賛は、永正4年（1507）に書かれたもので、これ以前に雪舟が亡くなっていることを伝えています。現在、この作品が絶筆と認められていますが、この作品においても、雪舟独自の視線を画面奥に誘導するジグザグ構成や力強い筆遣いを見いだすことができ、彼の山水画の粋を極めたものといえるでしょう。

日本画壇での雪舟の意義

益田市没説も唱えられて、いまだ解明されていません。いよいよ、この連載「雪舟逍遙」も今回で終了です。筆者として、ご愛読に感謝の意を表明すると同時に、日本画壇における雪舟の意義について個条書きしておきます。

- ① 画の題材が山水・花鳥・道釈人物・肖像・風景写生など、幅広く、豊富であること
- ② 宋元画を中心とした古典を学び、水墨・着色の両面で描法を多様化させたこと
- ③ 画面構成が堅固で、空間的・精神的に奥深いこと
- ④ 作品に署名を入れ、印章を捺して、画家としての自立性を表明したこと
- ⑤ 教育者としても優れ、門下から優れた画家を輩出させたこと

これらが注目すべき点であり、総社市、そして、総社市民は雪舟のふるさとであることを誇りとし、そのことをさまざまな形で世界にアピールしていくことが大切だと考えます。



国宝 天橋立図 雪舟筆
(京都国立博物館蔵)

文／岡山県立美術館学芸課長 守安 収